

報 告

## 日本語の将来に向けて

—自己を発見し、他者を理解するための言葉—



平成20年（2008年）7月24日

日 本 学 術 会 議

言語・文学委員会



この報告は、日本学術会議 言語・文学委員会 古典文化と言語分科会、文化の邂逅と言語分科会および科学技術と日本語分科会の審議結果を、言語・文学委員会において取りまとめ公表するものである。

#### 日本学術会議 言語・文学委員会

委員長	今西 祐一郎	(第一部会員)	九州大学人文科学研究院教授
副委員長	田口 紀子	(第一部会員)	京都大学大学院文学研究科教授
幹事	庄垣内 正弘	(第一部会員)	京都産業大学文化学部客員教授・京都大学名誉教授
幹事	藤井 省三	(第一部会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	金水 敏	(連携会員)	大阪大学大学院文学研究科教授
	佐藤 昭裕	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	塩川 徹也	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	柴田 翔	(連携会員)	東京大学名誉教授
	高橋 義人	(連携会員)	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
	竹村 和子	(連携会員)	お茶の水女子大学人間文化研究科教授
	長島 弘明	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	花登 正宏	(連携会員)	東北大学大学院文学研究科教授
	福井 直樹	(連携会員)	上智大学外国語学部教授

#### 古典文化と言語分科会

委員長	高橋 義人	(連携会員)	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
副委員長	塩川 徹也	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
幹事	長島 弘明	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
幹事	花登 正宏	(連携会員)	東北大学大学院文学研究科教授
	今西 祐一郎	(第一部会員)	九州大学人文科学研究院教授
	田口 紀子	(第一部会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	伊井 春樹	(連携会員)	人間文化研究機構国文学研究資料館館長
	石原 千秋	(連携会員)	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
	逸身 喜一郎	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	岡崎 由美	(連携会員)	早稲田大学文学学術院教授
	川合 康三	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	佐藤 昭裕	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	鈴木 雅之	(連携会員)	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
	高田 康成	(連携会員)	東京大学大学院総合文化研究科教授
	田邊 玲子	(連携会員)	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
	中務 哲郎	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	中野 三敏	(連携会員)	九州大学名誉教授
	身崎 壽	(連携会員)	北海道大学大学院文学研究科教授

### 文化の邂逅と言語分科会

委員長	竹村 和子	(連携会員)	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
副委員長	工藤 眞由美	(連携会員)	大阪大学大学院文学研究科教授
副委員長	吉田 和彦	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
幹事	梶 茂樹	(連携会員)	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
幹事	鳥飼 玖美子	(連携会員)	立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授
幹事	松浦 純	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	庄垣内 正弘	(第一部会員)	京都産業大学文化学部客員教授・京都大学名誉教授
	藤井 省三	(第一部会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	木村 榮一	(連携会員)	神戸市外国語大学学長
	齊藤 泰弘	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	柴田 翔	(連携会員)	東京大学名誉教授
	高橋 和久	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	千葉 文夫	(連携会員)	早稲田大学文学学術院教授
	野間 秀樹	(連携会員)	東京外国語大学大学院地域文化研究科教授
	望月 恒子	(連携会員)	北海道大学大学院文学研究科教授

### 科学技術と日本語分科会

委員長	金水 敏	(連携会員)	大阪大学大学院文学研究科教授
副委員長	福井 直樹	(連携会員)	上智大学外国語学部教授
幹事	才田 いずみ	(連携会員)	東北大学大学院文学研究科教授
	庄垣内 正弘	(第一部会員)	京都産業大学文化学部客員教授・京都大学名誉教授
	上野 善道	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	木部 暢子	(連携会員)	鹿児島大学教授・法文学部長
	谷川 恵一	(連携会員)	人間文化研究機構国文学研究資料館複合領域研究系教授
	田村 毅	(連携会員)	東京大学名誉教授
	徳永 宗雄	(連携会員)	京都大学名誉教授
	豊島 正之	(特任連携会員)	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
	前川喜久雄	(特任連携会員)	独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語資源グループ長

# 要 旨

## 1 作成の背景

今日の日本社会はグローバル化時代を迎え、社会、経済、文化のレベルで構造的変革に直面している。加えて、経済格差による社会分断、家族形態や地域コミュニティの多様化、通信手段の急激な変革などの社会、技術、産業などの分野で観察される変動は、言葉による意思疎通と人間関係の構築の困難をもたらしている。言葉が本来持っているはずの意思疎通と関係構築機能の不全は、従来にもまして異文化間を含んだコミュニケーションの必要性が叫ばれる現在、看過できない重大な問題である。

言語・文学委員会は討議を重ねた結果、現在の状況に対応するために必要な日本語のあり方は「他者を理解するための言葉」であるという結論を得た。以下、「他者を理解するための言葉」としての日本語を構築し、伝えていくための具体的提言を行う。

## 2 日本語をめぐる現状と課題

グローバル化による異文化との日常的な接触は、日本の社会を多様化し、人間関係の様態にも変化を迫っているが、同時に日本語のあり方にも大きな影響を与えている。

### (1) 言語運用能力の低下

いじめや引きこもり、無差別殺人といった社会問題の背景を成す要因の一つとして、言葉による意思疎通の不全という問題が存在することは明らかである。また一方で、OECDの国際学力テストPISAの調査や、全国学校図書館協議会による読書調査は、日本の子どもの読解力や読書量が必ずしも十分なものでないことを示している。

### (2) 近年の日本語の変化

省略や符丁を多用する若者言葉やカタカナ語の日本語語彙への流入、敬語・丁寧語の変化など、近年の日本語の多様化は顕著である。しかしさらに重大な問題は、公的な場でもカタカナ語の頻繁な使用や官庁用語への迎合、論理的接続詞の軽視などが観察されることであり、公の場での日本語表現の劣化が懸念される。

### (3) 世界のボーダレス化と外国語教育

グローバル化に伴う、外国語、特に国際共通語としての英語の必要性に基づいて、小学校における外国語（英語）活動が打ち出されているが、その内容は危惧の念を抱かせるものである。また外国語教育は国語教育との関連で論じることが不可欠である。

### 3 提言 — 自己を発見し、他者を理解するための言葉の獲得のために

#### (1) グローバル化時代に求められる市民的教養の基礎としての言葉

##### ① 異文化理解の出発点としての母語

異文化理解とは、異文化と出会い異質性と向き合いながら他者との対話を成立させることであり、その出発点としての自己形成に不可欠なのは、母語としての日本語能力である。

##### ② 英語教育と日本語

外国語学習の観点から最も重要な中学校英語教育は、質量ともに一層の充実をはかるべきである。小学校段階では、他者との繋がりを可能にする開かれた心、言葉に対する感性と論理の涵養、豊かな人間性をはぐくむことを視野に入れた「言葉」の教育が望まれる。

#### (2) グローバル化時代に求められる日本語のために

##### ① 「他者」の理解の基礎となる自己確立のための言葉

言葉は「世界」の認識に不可欠であるどころか、「世界」そのものである。子どもは自分の経験を理解するための言葉を持っていなければ経験から学習することができない。たとえば「いのちの大切さ」を実感を伴って理解するためには、そのための「言葉」を体得していることが必要なのである。

##### ② 「他者」の発見と理解のための「古典」体験の必要性

「古典」を読むことは世界を理解することである。時代を超えて多くの人に読み継がれてきた「古典」を通して、子どもは自分とは異なった考え方や文化に触れることができる。また「古典」を読むために必要な想像力は、他者の思考や感情に対する理解を可能にする。現在の国語教科書における「古典」作品の比重が極端に少ないことは憂慮すべきである。

##### ③ 自己発見のための「書く」作業の重要性

「書く」ことは他者に語りかける行為でもあり、自己を客観的にとらえることを教える。書くことにより、既知の知識の整理が可能だけでなく、それまで意識に上らなかったことを発見する「知覚変革」が可能となる。

##### ④ 「共感」するための言葉を目指して

グローバル化時代に必要とされるのは、文化的背景や価値観の異なった相手を理解し、対話しようとする態度である。そのためには共感的想像力が不可欠であり、それは日本語の学習の過程でこそ身につけることができる。

### 4 おわりに 21世紀の日本語のために

現在地球は未曾有の危機的状況にある。今必要とされるのは科学技術そのものよりも、その背後で科学技術のあり方を支える広義の「哲学」である。異なる座標軸の中で、何がより重要で、何がより緊急であるのかを自ら判断し、自然・生命・人間について、繊細な共感を持って包括的に考えられる若い世代を育てるために、柔軟で力強い日本語の構築が今求められている。

## 目 次

1	はじめに	1
2	日本語をめぐる現状と課題	1
	(1) 言語運用能力の低下	2
	(2) 近年の日本語の変化	3
	(3) 世界のボーダレス化	3
3	提言 自己を発見し、他者を理解するための言葉の獲得のために	4
	(1) グローバル化時代に求められる市民的教養の基礎としての言葉	4
	① 異文化理解の出発点としての母語	4
	② 英語教育と日本語	4
	(2) グローバル化時代に求められる日本語のために	6
	① 「他者」の理解の基礎となる自己確立のための言葉	6
	② 「他者」の発見と理解のための「古典」体験の必要性	7
	ア なぜ「古典」が重要か	7
	イ 「古典」教育の必要性	8
	③ 自己発見のための「書く」作業の重要性	8
	④ 「共感」するための言葉を目指して	9
4	おわりに 21世紀の日本語のために	9
	〈参考〉公開シンポジウム「日本語の将来に向けて—ことばの教育は いかにあるべきか」(2007年7月21日 立教大学)	11
	〈資料〉第53回学校読書調査結果	13

## 1 はじめに

今日の日本社会はグローバル化の中で急速にその経済・社会構造を変えつつある。この不安定化した社会状況は、新たな価値の枠組みや経済・社会システムの再構築を要求している。このような変動の時期に何よりも重要であるのは、個人の考える力とコミュニケーション能力であり、その基礎となるのは「言葉」である。しかもそれは「他者を理解するための言葉」でなければならない。「他者を理解するため」の日本語は日本社会における世代間や細分化したコミュニティ間の相互理解のためのみならず、異文化理解と国際協調に不可欠である。それがあって初めて、日本人の言語表現は、英語であれ日本語であれ本当の発信力を持つことができる。

また地球環境の深刻な破壊が進みつつある現在、地球に住むすべての生命への共感と理解が何よりも必要とされている。人間としての「他者」だけでなく、人間以外の生命という「他者」に対する感受性を養うためにも、「言葉」の役割はこれまで以上に大きい。

以下、現在の日本語の問題はどこにあるのか、必要とされる「他者を理解するための」日本語とはどのようなものなのか、そしてその実現のためにはどのような具体的方策があるのかを、英語重視の教育政策が母語である日本語の教育にも大きな影響を及ぼしつつある現状をふまえ、広く日本の社会に向けて提言するものである。

## 2 日本語をめぐる現状と課題

現在、日本の社会は急激に変化しつつある。家族形態の多様化や地域コミュニティの変化、経済格差による社会の分断、インターネットや携帯電話の普及による通信手段の急速な発展など、社会、技術、産業などの分野で観察される様々な変動は、価値観の多様化と局所化、人間関係の希薄化、質・量両面における情報と人間生活との不調和を生み出している。加えて今日のグローバル化、ボーダレス化、日本で労働し生活する外国人の増加は、これまでの日本社会の構造を根底からゆさぶっている。

このような急速な社会の変動は、人間関係のあり方、特に人間同士のコミュニケーションのあり方にも、重大な変化をもたらしている。昨今の小・中学校から職場に至るまで観察される言葉によるいじめや、引きこもりの問題、また青少年による「誰でも良かった」という無差別殺人などの社会問題の先鋭化は、現在の日本社会がかかえる様々な構造的ひずみを如実に表すものであるが、同時にそこに共通するのは個人のレベルで他者との相互理解のシステムがかならずしも十全に機能していないという問題である。またグローバル化により他言語・他民族との接触の機会が増大しているが、それが交流の場となるのか、あ

るいは対立の場となるのかは、我々の他者との相互理解の能力にかかっている。

現在の社会変容に対応した新しい人間関係のありようが未だ模索されている最中であるということによる社会の不安定化と、グローバル化による異文化との日常的な接触という、今日我々が直面している二つの状況は、実はいずれもその根幹で「言葉」の問題と密接につながっている。

### (1) 言語運用能力の低下

このように社会が急速に変化するなかで、子どもから大人まで、意志疎通の不全が大きな社会問題になっている。とくに昨今の小・中学校で問題化しているインターネットや携帯電話での「言葉によるいじめ」は、母語である日本語を柔軟に駆使して人間関係を構築することができないでいる子どもの問題を浮き彫りにしている。住環境の変化によって子どもが集団で遊ぶ機会が少なくなったこともその原因の一つと考えられるだろう。他者との言葉によるぶつかり合いを通して他者を認識し、その他者との関わりで自己を発見するという、世界認識に不可欠な作業を十分に行わないまま、子どもは小学校で集団生活を送ることになる。他者との関わりという現実感を通して言葉を獲得してこなかった彼らにとって、そこで生じる行き違いや不快感を双方向の「言葉」の実践で解決することはしばしば困難であり、「言葉」はややもすれば単に一方的な暴力の手段となってしまう。

他方中学生以上に目を向けると、OECDが実施した15歳児を対象とする国際学力テストPISA(2006)<sup>1</sup>の調査結果では、日本の義務教育終了段階の「読解力」の平均点は全参加国中で15位であり、参加国数が一定でないため単純な数字の比較はできないものの、2000年度の8位、2003年度の14位と照らしてみても、高い習熟度を示しているとは言いがたい。また2006年度調査では「数学的リテラシー」が10位、「科学的リテラシー」が6位と、それぞれ「OECD平均より高得点のグループ」「上位グループ」に位置づけられているのに対して、読解力の評価は「OECD平均と同程度」にとどまる。

また全国学校図書館協議会が毎日新聞と共同で毎年行っている学校読書調査によれば、2007年度において、小学生の1ヶ月の平均読書冊数が9.4冊であるのに対して、中学生は3.4冊、高校生は1.6冊であり、一冊も本を読まない「不読率」も小学生で4.5%、中学生で14.6%であるのに対し、高校生では47.9%にもものぼっている<sup>2</sup>。しかも読まれている書物のうちで新しいジャンルであるケ

<sup>1</sup> 2000年度に第1回が行われ、以後3年ごとに実施される。2006年度は57ヶ国・地域が参加した。

<sup>2</sup> <資料>参照。なお1968年からの40年間を通じて、中学生の1ヶ月の平均読書冊数は1.7~3.4冊、高校生は1.0~1.8冊の間を推移しているの、この現象は定着していると思わなければならない。

一タイ小説が大きな割合を占めているなど、青少年が児童書から一般向けの書物へと読み進まない実態が明らかになっている<sup>3</sup>。最近では企業においても、新入社員の日本語でのコミュニケーション能力の欠如に対して深刻な危機感が生じており、日本人を対象にした「日本語検定試験」が誕生したほどである。

## (2) 近年の日本語の変化

近年顕著な日本語の多様化、たとえば、若者言葉における省略・符丁の多用（キモイ、KY）、カタカナ語の氾濫（ワークしない）、敬語・丁寧語の変化（ホットの方でよろしかったでしょうか）などには様々な原因が考えられる。その特定は難しいが、マスメディアを介した情報波及力の増大や、メールや携帯電話といった新しい通信手段の急速な浸透による瞬時かつ広域の情報伝播、グローバル化による英語の日本語への浸透などが背景にあることは否めない。

もちろん言葉とは変化していくものであるが、同時にその変化を方向付け、あるいは制御することも可能である。現在進行しつつある日本語の変化が、公共的な場でも日本語表現の劣化を引き起こすのならば、何らかの方策を講ずる必要があるだろう。公の場で観察される「カタカナ言葉による現実隠蔽、民間における官庁用語の迎合的使用、単語の意味の差異の無視、論理的接続詞の軽視、定型的表現への逃亡、情緒への凭れかかり等々」<sup>4</sup>は、我々の社会そのもののあり方を貧困化させるものになりかねない。

このような状況において、これまで培われてきた言葉の豊かさを受け継いで、新しい時代に適応した日本語を構築するための方法を考えることは現在急務であろう。

## (3) 世界のボーダレス化

世界のボーダレス化の影響は、日本企業の国際化、外資の参入、海外からの観光客や留学生、定住者の急増など社会の多様化、日常生活への外国語の浸透として現れており、英語使用にとどまらない多言語現象の広がり著しい。

また、グローバル化に伴う外国語、とりわけ国際共通語としての英語によるコミュニケーションの必要性は、カタカナ語の急増にとどまらず、英語力による進学、採用や昇進の選別などの形で社会に明らかな影響を及ぼし、わが国の教育にも決定的な変化を迫っている。後述するように、小学校における外国語（英語）活動の導入が新学習指導要領で既に公示されているが、このことも小学校での国語教育との関連で論じることが不可欠である。

---

<sup>3</sup> 毎日新聞 ユニバーサロン ニュースクリッピング（2007年10月27日）。

<sup>4</sup> 柴田翔「寛容度ある日本語像を」（『学術の動向』2008年1月号、61頁）

以上のような日本語をとりまく現状をふまえ、特に次世代のために必要な対策に焦点を絞り、いくつかの提言を行う。

### 3 提言 自己を発見し、他者を理解するための言葉の獲得のために

#### (1) グローバル化時代に求められる市民的教養の基礎としての言葉

##### ① 異文化理解の出発点としての母語

異文化理解とは、異文化と邂逅し異質性と向き合いながら、他者との対話を成立させることである。この際の「対話」とは、狭義の会話にとどまらず、古典を読むことからインターネットでの意見交換なども含む、自己の「内なる声」と「他者の声」との相互行為を指す。そのような場で、自らとは異なる他者を認識するにあたっては、自己の確立が前提となろう。己を知らなければ、他者を認識することは望めないからである。そして異質性への開かれた心、他者への寛容さを生む出発点としての自己形成に不可欠なのは、母語であり、多くの日本人にとっては日本語である。

さらにいえば、異なる他者とは外国のみに限定されたものではなく、世代間、障害をもつ者と健常者、ジェンダー間など、社会のあらゆる場に存在する。異文化理解が日常的に求められる多様な社会にあって、思考の源であり人間関係構築の基盤である言葉の力の弱体化という事態は、深刻な問題である。この状況を解決するには、初等・中等教育における抜本的な取り組みが必須であり、異文化理解の基礎として、自己確立を支える日本語によるコミュニケーション能力育成は喫緊の課題である。

##### ② 英語教育と日本語

教育の目的は社会の目指すべき姿と密接に関係し、その結果が社会の姿に反映されることになる。そして教育の方法は、その目的と密接に結びついている。いま日本社会では、「英語コミュニケーション能力」の重要性が当然視され、学校英語教育の改革並びに英語の早期教育への関心が高まっている。しかし、必要とされるコミュニケーション能力の内実は必ずしも明確ではない。本来なら、これからの世代はどのようなコミュニケーション能力を身につけるべきか、英語といかに接し、いかに活用するべきなのか、その結果として日本語がどのように変質し、役割を変えていくことになるのか、といったことに関して十分に議論を尽くし、長期的展望を持ってその方途を考えるべきである。

しかしながら、このような日本の将来像についての議論がまったく行われな

いままに、全国の公立小学校で「外国語活動」として実質的な英語教育が先行導入されようとしている。

この 10 年来、グローバル化時代の国際共通語としての英語の重要性を根拠として、文部科学省による英語コミュニケーション能力育成策が積極的に推進されてきており、包括的な言語教育政策（『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」2003）の仕上げとして、新学習指導要領（小学校は平成 23（2011）年度から中学校は平成 24（2012）年度から施行）では、全国の公立小学校における英語必修化が盛り込まれた。小学校での英語は、これまでの「総合的な学習の時間」における「国際理解教育」の一環という位置づけから離れ必修化されることになるが、「教科」ではない為、「外国語活動」とされ、教科書は使用せず、成績評価も出さない。

2008 年 3 月公示の新学習指導要領によれば「外国語活動」の目的は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことにある。英語のスキルを教えるとはされていない。しかし「外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること」が明記され、活動で使用する「英語ノート」も文部科学省により試作されており、教育産業による各種英語教材開発も既に盛んに行なわれている。小学校英語教員養成など肝心な部分の条件整備が十分でないまま、小学校 5・6 年において週 1 回の「外国語（英語）活動」が事実上決定したことになる。

新学習指導要領では、「指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること」とある。このうち、「ネイティブ・スピーカーの活用」については保護者の期待が大きい。全国の公立小学校すべてに行きわたるほどの数は見込めず、質の確保という問題もある。既に各地で増加しているような英語ネイティブ・スピーカーの民間業者への委託となれば、公立学校における必修教育としての意義が問われることになる。「地域の人々の協力」については、「英語に堪能」であることの判断が難しい上、有資格が要件とはなっていないので基本的にはボランティアであり、専門家ではない人々が児童英語教育を担当する可能性が否定できない。より重大なのは、小学校英語活動を学級担任が中心的に担う、という点である。昨今の公立小学校が抱える種々の問題を考えると、その上に専門ではない英語の指導まで担うことになる学級担任の過重負担は深刻であり、そのことが児童の健全な育成にもたらす悪影響は看過できない。

外国語習得にあつて入門期の教育が肝要であることは、あらためて指摘するまでもない。吸収力の強い児童期ならば、なお一層の慎重さが求められる。子

どもたちは、学校で教えられる英語がどのようなものであるか是非を判断する能力がないまま素直に受け入れてしまう。小学校で専門家でない指導者から学んだ英語が間違っていた場合、中学校に入ってから、あるいは長じてから、それを正しく学び直すことは至難であり、結果的に迷惑を蒙るのは肝心の子どもたちである。

新学習指導要領では、「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めること」が挙げられ、(1)外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと、(2)日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと、(3)異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めることを指導する、となっている。これらは、いずれも容易なことではなく、その指導を十全に行なうには、言語とコミュニケーションについての知見と高度な専門性が必要である。新学習指導要領の本格実施にあたっては、児童を対象にした英語コミュニケーション教育を専門とする教員の養成と確保が、公教育として最低限の前提であろう。

子どもたちの「生きる力」は新学習指導要領においても大きな目標であり、加えて各教科を通して「児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」が求められている。このことを考えれば、小学校では、英会話の練習に週1時間を費やすことを目的とするのではなく、中学校英語教育との連結を念頭に、より広い視野で、小学校段階にふさわしい「コミュニケーション能力の素地」のあり方を真剣に考えることが求められる。英語学習の観点から最も重要な時期は中学校であるが、これまでの中学校英語教育は決して十分ではなかった。小学校英語はそのままでは大人になって使える英語にはならないが、将来の基礎を培う中学校における英語教育こそ、質量ともに一層の充実をはかるべきである。小学校段階では将来へ向け、他者との繋がりを可能にする開かれた心、言葉に対する感性と論理の涵養、さらには豊かな人間性を支える「日本語能力」育成を第一の目的として、地道な基礎作りを工夫することが切に望まれる。

## (2) グローバル化時代に求められる日本語のために

### ①「他者」の理解の基礎となる自己確立のための言葉

言葉は「世界」の認識に不可欠であるどころか、「世界」そのものであると言っても良い。人は体験を積み重ねることによって、自らをとりまく世界を発見していくが、体験を体験として認識するためには、言葉によって体験の分析と

把握が行われなければならない。言葉をとおして体験は一つの形を取り、そのような形を持つものとして我々の記憶に登録され、それまでの我々の思考・感覚システムに変更をもたらす。これは人が成長する過程に他ならない。このように個々の体験の理解とその積み重ねは、体験する我々の言葉の働きに支えられていると同時に、我々の言葉を豊かにもするのである。

子どもは、自分の経験を理解するための言葉を持っていなければ、経験から学習することができない。逆に経験からの学習がなければ、子どもの言葉は貧困であり続け、その世界像は豊かになることはない。この悪循環が断ち切られないかぎり、たとえば「いのち」の大切さがいかに唱えられようとも、子どもが「いのち」や「死」を自分なりに実感することはない。「いのちの大切さ」を本当に理解するためには、そのための「言葉」を体得していることが必要なのである。

そしてそのような言葉を獲得してはじめて、子どもは自らを尊重すると同時に他者を思いやることが可能になる。言葉によるいじめや虐待が示す「言葉の暴力」に対する彼らの無感覚は、子どもが言葉の重さを十分に実感していないことを示している。

## ②「他者」の発見と理解のための「古典」体験の必要性

それではどうすれば子どもに言葉の豊かさを教え、経験から学ぶ方法を会得させることができるだろうか。家庭や地域コミュニティーでの子どもに対する語りかけ、あるいはすでに多くの小学校で実践されている「読み聞かせ」や「読書の時間」などは有効な方法である。

しかしより根本的な対策として、次のことを提案したい。すなわち子どもに小学校高学年から「古典」にふれさせること、そして「書く」機会を増やすことである。ここでの「古典」とは、いわゆる「古文」に限らず、広く日本文学、世界文学、あるいは思想的、歴史的著作の中で、時代と地域を超えて世界で読みつがれている作品をさす。

### ア なぜ「古典」が重要か

「古典とは、私たちが読む前にこれを読んだ人たちの足跡をとどめて私たちのもとにとどく本であり、背後にはこれらの本が通り抜けてきたある文化、あるいは複数の文化の（簡単にいえば、言葉づかいとか慣習の中に）足跡をとどめている書物」<sup>5</sup>である。「古典」を読むことで子どもは新たな「言葉」を発見

---

<sup>5</sup> イタロ・カルヴィーノ『なぜ古典を読むのか』須賀敦子訳、みすず書房、1997年、7頁。

し、その新たな「言葉」が表す豊かな世界像に触れることができる。知らなかった感情、気づかなかった感覚の壁、新しい考え方、あるいは時間や空間を異にする社会を体験することで、物理的に限定される個人の経験を何倍にも増やすことが可能になる。

同時に、「古典」体験はある意味では「異文化理解」の一つの形であり、「古典」という「他者」をとおして、より普遍的なものをかいま見る機会を与えてくれる。「古典」が指し示す安定した世界認識と人間観察は、子どもの自己認識の手がかりになると同時に、世界の中での自己の相対化を可能にするのである。

加えて時空間を異にする世界を文字のみで描き出す「古典」の読解は、想像力を要求する。子どもは目の前にないものを言葉の力を借りて呼び起こさねばならない。見えないものを推し量ることは、他者の思考と感情に対する想像力（人の立場に立ち、人の痛みを理解する）を養うことにつながる。同時に「古典」が描き出す様々な感情に触れることは、感受性を涵養し、その結果自然をいとおしみ、弱いものを慈しむ、豊かで細やかな心をはぐくむ。

また、しばしば異なった価値観の対峙や、それに起因する深刻な人間同士の対立を描く「古典」作品は、価値観の多様性に目を開かせ、自らの判断に対する批判的まなざしと、「他者」に対する寛容を教える。

## イ「古典」教育の必要性

このような自己認識の根底を形成する「古典」に、子どもが適切な時期に触れることの重要性は、家庭教育のみならず初等・中等教育の場でも十分に留意されるべきである。現行の小学校の国語教科書が調査・発表といった「言語活動」やコミュニケーションを重視するあまりに、文学作品、なかでも古典作品の比重があまりに少ないことには強い危惧を覚える。「言語活動」が国語学習の重要なテーマの一つであることは言を待たないが、現在のままではあまりにもバランスを欠いていると言わざるを得ない。

何よりもいま肝要なことは、小・中学校での国語の時間数を増やすことであるが、現在の少ない授業時間の中で大部の古典作品を取り上げることが難しいのならば、副読本という形で授業の対象とし、子どもが古典作品に触れる機会を増やすことが望まれる。正確に読み、理解する教科書と、全体をとらえて感得する副読本とを、バランス良く教える必要があるだろう。

### ③ 自己発見のための「書く」作業の重要性

「書く」時間は「考える」時間でもある。それは自分自身に問いかけ、自分自身と向き合う時間であり、自己発見の契機となる。同時に書くことは、他者（あるいは他者としての自分）に語りかける行為としての側面を持つため、自

己と他者の対峙を仮想体験することができる。自分以外の人に理解されるだろうかと自らに問いながら言葉を選ぶことは、他者の思考や感性を想像することであり、自らを他者の目で客観的に見ることにつながる。こうして自らの閉じられた認識空間から出て、他者との共通の場に置かれることに耐えうる言葉を探することは、普遍的認識へと自己を開くことである。「書く」というすぐれて個人的営為は、実は他者による自己陶冶への第一歩なのである。

日記、手紙、作文、授業ノートなど、多くの機会に子どもが「書く」作業を行うことはきわめて重要である。しかもその場合単なる既知の知識をまとめる「知識陳述」ではなく、それまでの認識を組み替え、新たな自己発見につながる「知識変革」<sup>6</sup>型の書く行為を指導することが肝要であろう。

#### ④「共感」するための言葉を目指して

これまで行われてきたディベート教育は、批判的思考を養う意味では非常に効果的であった。しかし他方で、具体的論点に関しての是非を争うためのスキルの養成という側面が重視され過ぎるきらいがあったことは否めない。グローバル化が進む現代において我々に求められるのは、むしろ文化的背景の異なる相手が何を感じ、何を考えるかを理解しようとする、共感的態度である。そこで必要とされるのは、「討論」が成立し有益な意見交換の場となるために不可欠な前提としての「対話」である。

他者に対する開かれた態度は、討論の技術として学ぶものではなく、まず日本語の習得の過程で、基本的な他者との関わり方として身につけるべきものである。自らの経験に照らして相手の言うことを理解し、あるいは言わないことを推し量ることは、言葉の運用のあらゆる場面での基礎である。「討論」の背後にある相手の文化的背景や信条にまで至る「共感力」があってこそ、真の相互理解が可能である。

### 4 おわりに 21世紀の日本語のために

「21世紀を迎えた今、私たちはとくに自ら考える人を必要としている。(…)地球環境問題、新興感染症、水や様々な資源の分配のゆがみ、飢餓と飽食の同居などなど…地球全体に目を向け、そこに生きる人々すべてと共に、いや人だけでなくすべての生き物と共にいかに生きるかを考えなければならない時代に入っているのだ。」<sup>7</sup>

人類がかつて経験したことのないこの危機的な状況の中で必要とされるのは、

<sup>6</sup> 内田伸子『発達心理学 言葉の獲得と教育』岩波書店、1999年、第8章「書くことによる認識の発達」

<sup>7</sup> 中村桂子「いのちを語る言葉を求めて」(『学術の動向』2008年1月号、63頁)

科学技術そのものよりも、むしろその背後で科学技術のあり方を支える広義の「哲学」である。相互に対立する複数の座標軸のなかで、何がより緊急で、より重要であるのかを判断し、自然・生命・人間について、繊細な共感を持って包括的に考えられる若い世代を育てるために、これまでのどの時代にも増して、柔軟で力強い日本語を構築し、伝えていくことが求められている。

〈参考〉

**公開シンポジウム**  
**「日本語の将来に向けて—ことばの教育はいかにあるべきか」**

日 時 平成19年7月21日（土） 13：30—18：00

会 場 立教大学 池袋キャンパス 7102教室

**プログラム**

13：30—13：35

□開会の挨拶 今西祐一郎（九州大学教授、日本学術会議言語・文学委員会委員長）

13：35—13：45

□挨拶 鈴村 興太郎（一橋大学経済研究所教授、日本学術会議副会長）  
大橋 英五（立教大学総長  
代理 笠原清志 総長補佐・経営学部教授）

13：45—14：05

□基調講演 佐藤 学（東京大学教授、日本学術会議第一部副部長）

**第1部 各専門分野からの現状報告と提言**

14：10—14：40

□内田 伸子（お茶の水女子大学副学長、日本学術会議第一部会員）  
「考える力を育むことばの教育」

14：40—15：10

□身崎 壽（北海道大学教授、日本学術会議連携会員）  
「現代生活と古典文学—教養主義を超えて」

15：10—15：40

□鳥飼 玖美子（立教大学教授、日本学術会議連携会員）  
「真のコミュニケーション能力を培うために—母語と外国語を繋ぐ言語教育」

15 : 40－16 : 10

□柴田 翔 (東京大学名誉教授、日本学術会議連携会員)

「異文化への覗き窓としての第2外国語—日本語・日本文化の将来へ向けて」

16 : 10－16 : 40

□中村 桂子 (JT 生命誌研究館館長、日本学術会議連携会員)

「いのちを語る言葉を求めて」

<16 : 40－17 : 00 休憩>

17 : 00－18 : 00

## 第2部 総合的提言に向けての討論

□司 会 高橋 義人 (京都大学教授、日本学術会議連携会員)

□指定討論者 長島 弘明 (東京大学教授、日本学術会議連携会員)

福井 直樹 (上智大学教授、日本学術会議連携会員)

18 : 00

□閉会挨拶 庄垣内 正弘 (京都産業大学教授、日本学術会議第一部会員)

□総合司会 田口紀子 (京都大学教授、日本学術会議言語・文学委員会副委員長)

<資料> 第53回学校読書調査結果 (『学校図書館ニュース』より)

